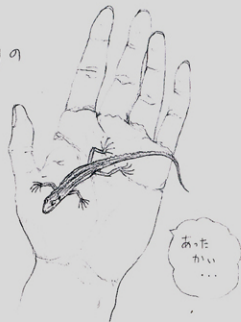


日だまりの友

我が家で最も日当りのいい場所に半地下のフレームを作り、寒さに弱い植物の越冬や早まきの野菜などを入れているが、このフレームの木製のわくに、暖冬の年のたまたまとても暖かい日に、カナヘビの子どもが1匹日なたぼっこをしていた。あまりの暖かさに、思わず出て来てしまったのたろう。



カナヘビは、夏の終わりに卵がかえるので、越冬中の子どもたちは、また小さい。よく見ると、手足を伸ばし、目をつぶって気持ちよさそうだ。



試しに手を差し伸べたら、手が暖かかったせいか、それとも寝ぼけていたのか、手の上に乗ってきた。そして、手のひらにアゴをペタッとつけ、手足をだらりとさせて目を閉じている。

野生の爬虫類のくせに、まるで手のり文鳥のようではないか。わたしは特別な爬虫類好きではなく、どちらかといえば、虫を食べてくれるのはありがたいけれど、あまりお近づきにはなりたくない... と思っていた。ごめんね。

カナヘビやヤモリのなかには、なぜかときどきそんな友好的、というかのんびりちゃんがいるようだ。おどかしたりしなければ、ときどきはこんな交遊が楽しめる。か、こういう個体はたぶん長生きは難いだろうと思う。

同じ仲間でも、金属光沢のあるトカゲはいまひとつ親しみが持てないが、それは彼らの「見つかったら逃げる」というホリシーのせいだろう。彼らはときどき、金木植えのなかで冬眠している。